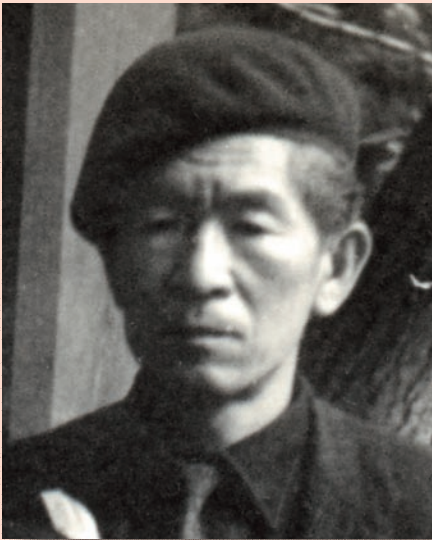


いまだひさし
今田久

下関市
(1908～1968)



【著作】

詩集『喜劇役者』（昭和14・二〇世紀刊行所）

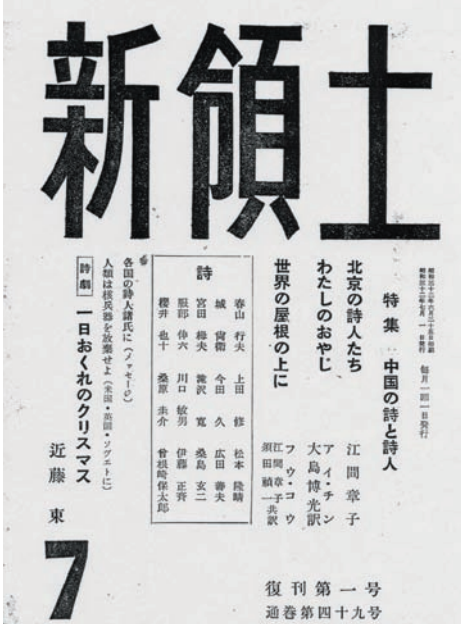
明治四十一年（一九〇八）、父の任地対馬で生まれ、本籍は山口県美東町（現・美祢市美東町）。青年期の時、東京や戦時疎開先の長崎県田平町に住んだが、青少年期から晩年まで主に下関に在住。詩作の主要活動も同地だった。昭和四十三年（一九六八）下関で六十年の生涯を終えた。

昭和三年（一九二八）、『詩と詩論』が創刊された。その中核となる「超現実主義」は詩・文学だけでなく芸術一般の前衛的諸潮流に多大な影響を及ぼした。今田は、これに深く傾倒し、この運動に協調的な百田宗治の『椎の木』に初期作品を発表した。昭和九年（一九三四）下関出身の詩人桑原圭介との出会いは、相互の詩活動を決定的なものとした。以後、同人や作品発表詩は常に同じ『手紙』『二十世紀』『新領土』などであった。『手紙』は一時桑原が編集し、『二十世紀』は若い前衛詩人が結集し、昭和十二年（一九二七）に創刊された『新領土』は当時の前衛的詩人春山行夫、近藤東らが活躍した。『新領土』への発表作品は諷刺的暗喩により注目されたが、昭和十六年（一九四一）戦時下で休刊し、発表の場を失った。昭和十四年（一九三九）に『二十世紀』社から詩集『喜劇役者』を上梓したが、これが唯一の詩集となった。

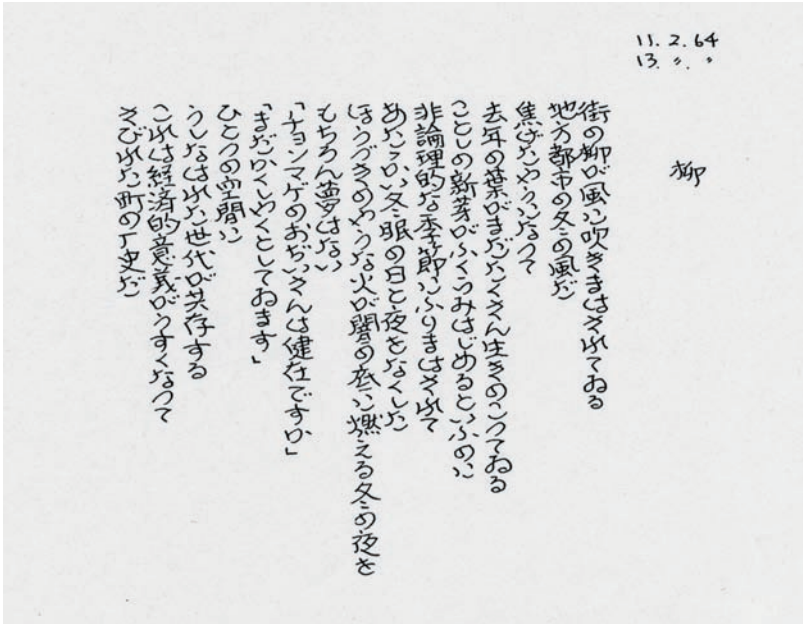
昭和三十年（一九五五）下関市に帰り、翌年桑原らとともに「現代詩研究会」を発足させ、後に「関門詩話会」へと引き継がれた。同じメンバーを中心に昭和三十五年（一九六〇）「主題の会」を発足、詩誌『主題』が刊行された。この間、地元紙や全国紙地方版に画家たちとの合作詩画を連載、詩画展の開催などの活動をした。また『現代山口県詩選』には第一回から寄稿した。他に、久留米市の丸山豊が編集する詩誌『火』の同人となり、作品を発表し、戦後昭和三十二年（一九五七）復刊した『新領土』（東京）にも同人として参加し、第一号から作品を発表した。

主要作品は『新領土』復刊連載の「D氏への主題」で、ここで試みた組詩の形式は、晩年の約十年自らの主題として展開した。前衛的詩はとくく現実逃避や芸術至上主義といわれるが、今田の一連の詩は社会への深い洞察に裏打ちされ、その形象化は諷刺性に溢れており、異彩を放っている。多数の未発表原稿は、一部の人々に注目されている。

（文・米田二三）



『新領土』（復刻第一号）



直 筆

叢林の笛

ブナの樹の森で
大工のやうに考へたものだ
自然の改造について
こぶだらけの幹の暗示
盆栽の美学は
畸型の倫理学
それゆゑに放射能障害による目のない胎児
のやうなヒウマニズムで
叢林に笛を吹く土人の
哀愁におよぶものではない
ポパイの腕のやうな
手腕家の金融業者が
妻と子のために
家を建てた
大工のやうに建材店の裏庭で不正が行はれる
のをみた
踏みにぢられた人間への信頼
がジャン・ジャック・ルソオのやうに
叢林の秩序をみだす蛇のやうに
足首に巻きついた鎖に
怒りをおぼえた
ブナの樹の森は
燃えなければならぬ
太陽と月とではかられるこの歳月の意味がない
おびただしい落葉のやうな
貧困と不幸の堆積のうゑに
このブナの木の森がある
足首に巻きついた鎖をひきずつて
叢林に笛を吹く土人のやうに
文明への信頼を失ふのだ

（詩誌『遠近法』第一号巻頭）

今田久年譜

（提供・米田二三）

明治41（一九〇八）年	
大正15（一九二六）年	一八歳
昭和3（一九二八）年	二〇歳
昭和8（一九三三）年	二五歳
昭和9（一九三四）年	二六歳
昭和12（一九三七）年	二九歳
昭和13（一九三八）年	三〇歳
昭和14（一九三九）年	三一歳
昭和16（一九四一）年	三三歳
昭和19（一九四四）年	三六歳
昭和30（一九五五）年	四七歳
昭和31（一九五六年）	四八歳
昭和32（一九五七年）	四九歳
昭和35（一九六〇）年	五二歳
昭和39（一九六四）年	五六歳
昭和43（一九六八）年	六〇歳
昭和45（一九七〇）年	

《没後》

昭和45（一九七〇）年

【関連情報】

発表詩誌……『新領土』（昭和12年～16年）復刊『新領土』（昭和32年～）

『湾』（平成3年～8年）

『火』（昭和37年）『主題』（昭和35年）

3月14日、父素輔、母サワの長男として父（職業軍人）の任地対馬で生まれる。本籍山口県美東町大字綾木一六九二番地（現・美祢市美東町）。山口県立下関中学校（現山口県立下関西高等学校）第二回生として卒業。『詩と詩論』発刊。超現実主義、モダニズムなどの芸術一般に影響。その指導的役割を担った西脇順三郎が昭和8年詩集『Ambarvata』を出版。いずれにも深く傾倒し、作風の根底を形成。前衛詩の一翼を担う百田宗治の『椎の木』に初期作品を発表。下関市出身の詩人桑原圭介と出会う。以後同人、発表詩誌、その他の詩活動とともにする。また詩誌『手紙』から『20世紀』に参加、精力的に作品を発表。『20世紀』同人酒井正平に大きく影響される。詩誌『新領土』が発刊される。編集同人に春山行夫、村野四郎、近藤東らの前衛詩人達があり、その中で超現実的で諷刺に富む独特の作品で注目を浴びる。東京で会社就職。『20世紀』『新領土』等の多くの詩人達と交流。『20世紀』社より詩集『喜劇役者』（昭和12年～13年の作品）を刊行。唯一の詩集となる。戦時下、『新領土』休刊となり、作品発表の場を失う。東京から長崎県田平町へ戦時疎開。以後昭和30年まで同地に居住。長崎県田平町から下関市後田町一〇三番地の実家に転居。下関市において桑原圭介らと「現代詩研究会」を発足させ、指導的役割を果たす。「現代詩研究会」は北九州市在住者等のメンバーが増え、「関門詩話会」と名称を変更。同年戦時休刊していた『新領土』が復刊され、第一号より精力的に作品を発表。「関門詩話会」のメンバーを中心に「主題の会」が発足。詩誌『主題』を刊行。同人・寄稿者に下関地区以外の丸山豊（九州）、奈切哲夫（東京）らがいた。同年、『みなと新聞』に奉職。嘱託として編集に従事、死去まで在職。この間、地方紙、全国紙地方版にしばしば画家たちとの合作詩画作品を連載。詩画展を開催。和田健、桑原圭介、磯永秀雄らによって『現代山口県詩選』が刊行され、第一回より寄稿。下関市にて病没。

「主題の会」より刊行された詩誌『遠近法』第一号の巻頭を遺稿「叢林の笛」が飾る。山口県光市の田辺朝一の主宰する『湾詩社』発行の詩誌『湾』が平成3（一九九二）年より平成8（一九九六）年まで五年間、32号にわたって遺稿約三二〇篇を連載。